盛衰通紀

二十

姫

戰記

第七

共廿三

内閣文庫
和書
類
三四七〇九
號
三三
冊
五一函
七架
(四十六)

内閣文庫
番號 和 34709
冊數 33(14)
函號 151 60

国立公文書館
National Archives of Japan

盛衰通記巻第二十

目録

今川氏真責尾州鳴海江城事
佐々木義頼与浅井不快
付義頼隠謀之事
六角家衛誅後藤父子付野村白状之事
後藤義秀之云者籠箕作城付義秀義頼和平之事
六角家衛不仁没収付天変之事
勢州関与工藤合戦付将軍義輝出奔之事
飯富虎昌三人乞献諫書於信玄
付信長濃州岩村評定之事

内閣文庫

信長責丸岡居國事

河州一揆退治付天寛并寺院大燒之事

太田源六叛逆付鵜臺軍

并　松本大隅太田源六勇力之事

二度鵜臺合戰付里見義弘敗北之事

謙信信玄和睦不調付謙信以謀略退信玄事

信州河中嶋軍付安房与長谷川組討擒之事

三州一向一揆不及合戰付一揆悉降参之事

遠州引間城攻付戸田丹波守忠節

并　戸田康城三州一統平均之事

越州白井城攻付松田太田勇力并謙信信州發向之事

安宅冬康依讒誅付下々怨哭

并　三好長慶隠死去事

結城晴朝背北条氏政付北条氏繁攻城之事

以上

盛衰通紀巻第二十

今川氏真責尾州鳴海城事

永禄三年今川義元うたれしかとも其子氏真ハ永禄六年迄も弔ひ軍の心かけ無しされハ駿府太守の門へ程欲去族を集て氏真をさらしけれハ口惜くや思ハれけん信長持城尾州鳴海城をせめんとて駿遠参の兵を催しけるに　徳川殿ハ氏真と敵して合戦ありしかとも今川ハ大敵なれハ後詰をたのひて深溝松平源三郎并ニ酒井将監か娘を人質として出し和平のていなる加様を見れしまゝ氏真一向一揆の最中なれハ弟いなといハれて今川家と一向宗同意せハ新恩あらんとて大久保一党ニ三百余騎をそへてきさる氏真ハ七千余人鳴海城をせめけり此時　徳川家大久保

七郎左衛門尉世中治部右衛門尉佐大久保新八郎利同甚四郎右衛門尉阿部
四郎右衛門尉政松浦八郎左衛門治栄父子一番に鑓を入て鑓を鑑
江の七本鑓と云ひされとも城ハ行とか鑓と号え
しかハ氏真ハ名をとして先駿州へ入りけり此時今川家の一そく京
都に在し人〃の方より飛脚をもて家の有様を申越も去永禄
三月朔日義輝公細川晴元入道一清ハ去る此三好長慶父子か為にうり
出されて摂州に有しか卒去しけり是三好かこころを知るとも
人将軍も今の三好ヵ有様将軍の代をうらへ以んと日久しく家へ入
を飛れハ国〃両の有様を大ゐすまし家人をあつれさわかへ
一同好の者とも合力せんと申触をされとも氏真ハ晴く
酒宴乱舞詩歌蹴鞠のことにしてむなしく月日をおくりけり

佐々木義賢与後藤浅井不快付義賢隠謀之事

佐々木六角義賢ハ兄弟実ヵ陣代として江州一国の権をとりし
故今ハ義秀の代となりても一向守護のごとくにして世人義秀を志ゆ
人なし然るに義秀の家臣後藤但馬守并浅井備前守長政も
内〃ハ悪んで有けるか外ハ志従して是を見せて無人首さしよせて義
賢を亡さん事を思ふ所義賢よく志りて謀に子息右衛門佐義弼を
後藤但馬守かむこにして是を結ひしかハ外ハ和とけしかとも
浅井ハ兎角にせさりけるにより義賢か旗下に蒲生下野守定秀は
後藤但馬守か縁者にて有しかとも義賢にはしく引入れて六角
家の旗下となり定秀か嫡子を蒲生左兵衛と以て後ハ右兵衛大夫
賢秀と云ふ其嫡子を忠三郎と以て後に従三位宰相氏郷叙任し

蒲生高郷氏とかくし 快幹か末子なり 定秀男子四人あり 一人
賢秀 二ハ江州佐久良城主小倉播磨守か養子にて小倉相之丞
とゆふ後に実隆とゆふ 三ハ蒲生左兵衛秀俊 四ハ三井寺
法師にて金光院といひし 子孫して青地家の養子となり
青地庄家としいひて 後ハ駿河守茂綱といふ 女子も四人あり
一人ハ勢州神戸蔵人友盛か妻也 一人ハ同国関安芸守盛信か妻
なり 一人ハ後藤新上総介貞秀か妻也 一人ハ江州池田孫次郎景雄右知か
妻也 今按ずるに 一家に広き 老臣萩積女を己か子として氏
郷氏か千種蔵人所望ニハ江州浅井治部か所望の余兵を養子として
千種三郎左衛門の所乱と名のる 家ニ六角承禎ハ小にせを見るんと
て蒲生某ニ蒲生を名のらしむ 元より之を合せ 去る天文年中江氏より

小倉参河守実隆を大将として 数千人勢州へ発向して千種父子
ハ元来六角家の一味なれハ江氏勢と成れ合て千草近辺の小城を
攻行陰へしに蒲生定秀ハもとより六角家の先陣し 数度
功ある家也 六角家の執権たりしか今度小倉か軍功ありて六角
家に用られし事を猜み実隆の蹤を立て小倉を追出されけれ
小倉ハ其身ハやうやうて辛苦し子息与助ハ今川へ仕へ義元の家人
となりて其子内蔵助ハ氏真につかへ 年去て蒲生一人威を高ひ勢州
をうかゝひ屢関も神戸もむこなれハ一味なり 実盛信ハ亀山
か子也 神戸友盛ハ神戸備中楽の弟にて神戸氏か二男なり
初ハ楠氏の伯たりしか兄左京亮家絶 下総守 去家一族の
初了世せし家を信して兄の跡を相続し友盛とかわれり

友盛初め出家せさせ時の下剋後に男子二人ありけり一ハ
山路深正長盛とて高島の城主となれり弟ハ山路久之丞
家盛とて本より友盛か子也仍て渠等をたくはへ小富を
亡しを後藤浅井を討て江北一国を子息義弼に
ゆつらんとの心なりけり

六角義弼誅後藤父子付野村向候事

義弼後藤と縁者となりて表むきハ出入してうハへハ睦く見へ
しか内心にハ此事をふかくたくみけるに永禄六年二月廿三日
六角義弼か其頃在城観音寺城へ後藤父子を招き饗應のよしにてたちまちに
父子とも誅しけり同日義弼観音寺城へ来り義弼へ申けるハ
今日私宅へ後藤父子を招きしに後藤従者と種村三郎
と双六をうちてさいの目を論し忽チ後藤を切ころしぬ其子又
三郎ハ刀を抜て種村と戦ふを建部宗安正ハ種村に力を合
又三郎を切ころしぬ両人ともよそを構より来て欠落して其
行方を不知難義ハ刀も抜かまて又三郎ハ切合ひけるとらんくて刀
小切迄もみへけれ後に存にて両人をさとりしけるとや義弼其外
く族投あらく義弼ハ後藤浅井へ目代一味の老臣
観音寺城へ大せいつまりしを義弼制して入さる義弼ハ後藤
ゝ家人あ田種内宅野七三郎ら別角内至三人をたて兼て介
あやしきすハなりしやと尋ぬしに去二月のはより義弼
習の業を何めハ望て評定しぬかる故あり此事ハ敵
しまて種栗ハ義弼の家人野村丹後守あるなし人とや申けるとか

によりて義秀丹後を取らるゝ事に付憤りしかハ和泉山城を以て
委細殿ハ二の丸に休息せしめらるゝとや申も和泉殿
ゆへて後藤と義弼といふ父子の好あるに種村と建部か二の丸
まて後藤を討て立退しを義弼の家人ともとめくと思ひ
〔きやうこまと〕其月廿七の夜何すそ義弼に於ては携同して
いかせんとあらく変らしかハ肥村白状しけるハ義頼ハ悪心ありき
に後藤浅井六角家を亡し義秀の代を奪んとす浅井と申
男ハ元人京極殿の世をうかゝひしもの子孫なり後藤も是ハ
推しなりし浅井と心を合せて義頼を亡しては浅井をそへ毒
飼して失ひ江州をえんとの謀をなり義頼も是を知て先んす
後藤ハ無勢なるものなれハ謀を以てころさんとて後藤の娘を
めとりて此度和泉十八人に血判させ起請をとらせ種村建部を
討手の役に定めまさしく寒の目を論しいさかひを仕かけて後藤
父子をうたせたり是皆義弼のたくらひ之又討手無人を八ヶ当〔
杉之殿さんとてきれらく当国江雲寺にかくし置れしと申により
彼白状を見て丹後をハ番兵を添而して江雲寺〔討手を出し
二人ともにからめとりて委細殿しよ肥村か中にくらハ其刎牢へ
入置かりされとも此度義弼か而ふて義頼かたくらみなる事を白状に
のせしかハ義頼か罪ハ帳なかりけり

義秀か古寄箕作城付義秀義頼和平之事

既に義弼か陰謀あらハれしかハ〔にハ三千騎〕一万三千人三月廿七日箕
作へをしよせける義弼もかねて期しけるなれハ城口をかためゐ合せき

なりしかに蒲生賢秀ハ後藤と縁者なれハ後藤か横死を見て
ハ義賢へ与すへき事ならねとも今様子を見んに義賢か為人
のことくしたるものも皆なかされて討るゝに命ふされハ事の急
なりとおもひて常ニ人へ加らんハ口惜き事也と終に義賢父子討れなハ
江州ハ浅井か押領となるへし賢秀ニ於てハ義弼を主君と立んとて密事(?)
ひそかに家人を流遣して城へ召す此時承禎ハ在京の城に有
しか蔵合修理亮を使として親昔達へも申し義秀へ申さハ親父
承禎より某(?)陣代として軍事ニ當し合を略毛より如く
して力を尽し忠を人にまさらんとおもひされハ賢秀一度も出陣
ありしかはややもあれハ承禎を亡んとする也と思ひ(?)
よしなく今度義弼かたのミに後藤を討てその罪を義弼へ御
つけ諸士へ委細の紀明なく出乱をおこしけれともつねニ後藤
ハ帝末之義弼か事ハいかにも當家の一門之舎兄義実
の時當家の門葉たりし沢田大蔵少輔黒田刑部繩宗ハ義頼
をあいかうてせしか某彼両人を誅せしに旗紙も大にいかり
て義実へ訴へしに義実あるまじき護代たる義頼なれは出退
も侍家の思ひをなすする不絶之としかれて自今ハ義頼を
主人のことくせよと下知せられき然れハ義弼か後藤を討たるも
一往ハ由しもなき事なれとも今義弼ハ守護代之此理を定めし
ならん箕作の囲をとり給へしと申さる賢秀いかにも尤也とて
ニ京極も同意あるよいさめし承沢田城あるを箕作へ迎へし
囲を解しめ同年九月義弼をハ京極高吉ニ頼みたる仍て義

弼十八人を仇として高祖の氏ある浪人等を集め同廿日に承
禎を居て義弼ハ人々の恨ある事あり今度後藤父子を誅せ
られし某々世を奪んとするものと此事ハ家人等も怖畏を
含めり入たる度の四方家も亡れり事あり此れに於して
義弼ゟ主科を有るを申さる承禎も家に退出けり

六角義弼家氏没収并天変之事

同四月二日義秀不知して承禎ゟ義弼ハ由りし本氏ともく
没収して承禎ハ悔し付られ是ハ承禎永禄三年又く入たせし時
義弼ゟ家を由請り遣身ハ河辰栗本郡十八ヶ所を知行して
猶りハ之ゟ由請けし承之同廿四日紀伊山城守を使として向
後承禎ゟ家督ハ二郎に譲り立ける（としと之）承禎申りるハ
二郎ハ義実の時大京中迷ゟ保ゟ事十せり今度又九月とし
をしたらふ此由ゟ仍りてやうれハ又むしゟ天下ゟ如何ゟれん
義秀ゟ為ゟ言ゟ為二郎を家督として本氏ゟ諸由りて承禎ハ
隠居せらる（とし之）仍て寛承ゟ第二郎（らり所望ひとし）と義弼を
悔弟させし為の情とかや今年天下洪水し人民多く溺
死す五月十六日朝より同廿二日まて数日十五日の夕二十六時中
大雨ふりしなきり河内ゟ為り水かさひとり一万六千二百人溺死す
ことに牛馬ゟ称いくらくらや山城ゟ加茂川此辺り出水ゟして
流る東京町数六三町を流され其外洪水九分五厘ゟまり
浦々在々百七十五ヶ所水中よりひかる所々の堤きれて在家民
田畠を損害ゟ前代未聞之事也

勢州関与工藤度々合戦付北畠卿出奔之事

蒲生定秀同賢秀父子ハ兼て関家の長臣義積と一味せし
かハ関の一党ミな同治部少輔佐渡守兜右門等ハ自殺し
義積か旗下となりけれは同出羽入道工藤一族を具して神戸ハ関と累
年和好を重ぬる故に去る五月十六日関ハ人数をまとめ法言て雲林
院表へ出張し陣を工藤も神戸表へ出て旗をすゝめ諍抱せり
合ふらたりしまゝりそ撲入乱れ戦ひ双方三百六十人傷られ
死しけれハ工藤ハ謀をかまへ小川の侍とのを合せ長野右京
雲林院出羽細野九郎左衛門分部與左衛門乙部兵庫中尾門左衛
門近習として十余人安濃津より家来として東海
にぶる関方に喰付て関出三郎塩浜に使者をかけ

語らひけり工藤を始め神戸の使者ハ赤堀軍の使へも参り居りて本
意のことをなしとて秘よりあり使節して関の使者と偽りて机とりて
戦ふ程に一戦にも及ハすして工藤ハ敗北しけり名を惜むものも多く工藤
か旗下中にも又七人討死しけり関方にも神戸方の人々左盛か叔父
神戸大蔵左衛門以下十二人うたれけり工藤ハ当分になひて同月
廿八日亀山せの侍をかたらひ神戸表へ押出し先人数を分て関か
一味の城々をせめ先神戸か城をせめ急にせめ城内ハ神戸左盛ハ
自害しけり夜に入りを待て数を相しらふに工藤ハ急にせめかけ既
小夜に入しかハ工藤も長野も城へ帰陣あらんとするところに
えゆく所あせとて加ふることを責破られけるとてくさハくたし
就光るの門前へせめ入しに海き堀ありてその中へ入旗かさる

悉く死を致さんものなりし後陣は是を見てひさしに落延
に百餘人堀に入て死すかかり城中より急にせめ出けれは二波
羅勢は引くに引かれす此時又播州浪人赤松に与力の者とも
先陣下陣河島(?)等は同く赤松城をせむ赤松一党是は高(?)
下の軍兵とも城中にありてよくふせく故寄手陣を引けり
此赤松大学助は則村の三男にて勇力兼たる者なれは
の大軍を追返しける人皆感しけり則村赤松の居城ともに
六波羅は利を失ひしかは関はひとり感をなすなかに小伴(?)鉾の
侍は千種(?)忠顕(?)守護紀民紀(?)岸(?)藤(?)南部加用稲生赤松も関に
一を合せ来りて七郎に感をなして蒲生(?)道守にて古角(?)
義積(?)護下とありて与力のものをそろへて同忠素(?)の城へ押
寄てせめ落し富田四郎左衛門を入置けり関はかくのことく威をふるひ
ひ叡山に居住して棟梁のことくなれとも神戸(?)の城に往反(?)盤(?)
岩に峯(?)嶺(?)おちて鼎のことく峙て皆粉のことくならんとす(?)はつ
ちひし故動もすれは同士軍して終に一統せさりけり此(?)故将軍
は京中諸士の運をまもりて庶民のくるしみをさけ(?)ましきにて将軍
家より京中の地子(?)銭をゆるさる松田対馬守宗貞(?)後(?)藤(?)為警固
承(?)り洛中悉く是を(?)是亦は(?)去五日洛中の検断職にありける之又七月十四日十
五日毎日は将軍の命として洛東の河原表にさらさ(?)一万に報(?)を
ひきさせて毎日の寄(?)は行(?)時も急(?)多く一万人の僧を
供養し急(?)佛読経してさらに志ある僧侶はまいりて寺(?)佛の洛中
洛外の乞食非人等に毎日粥を施行せられ是は去五月溺死の

老枚十万人なりしをこふへらせ参らせや将軍の此意恐ニ執
りし事ともなり

美濃国三人衆降参　付　信長濃州岐阜に居定之事

永禄六年九月信長ハ西美濃へ発向し焼たてゝきびしく軍をなし
なりけるに美濃国三人衆と申して武勇の侍三人あり氏家常陸
介入道卜全稲葉伊予守通朝伊賀伊賀守定治是也同年十二月
十七日彼三人衆令会合し龍興の為をあやぶみて亡国のきざしを察し
信長へ従はんと謀まされけるも是を龍興をいさめしに取用ひず
今一度いさめていさめを入れずは信長へ従ふへしと不用ければ
是によりて大いに悲しみとて卜全か所存人々も一致して
諫言を三人衆志をしめ美濃国に例の奸臣等側にありて三臣
を讒せしかハ三人力なく織田へ組して名字を立んとて謀りける
されとも三人の者ハ家の子にも志をさせまりけり同七年四月
織田信長ハ長臣等を西川西美濃へのさしつかハされ給向にてつ
かれて切きたりし船橋川より向ひに要害のかまへてを持けき
兵を入置連てまもりて数地をかひやりしなハ終にハ一国平
均せんと謀させられけるに皆ともに云なして彼とりてハ数地なれ
味方とも少しも誰行てちからんとはさし出て其ものもなし定めて
岸田か丹羽か滝川なとハよも行かじへしとそひ振ぬるに信長ある
かの来祝をみて木下藤吉か入りしに藤吉と申す藤吉出る
信長か兵に誰か守らんと仰けり藤吉志そのくの人衆も
なく南方にハ夜討強盗の族多くけれハそれ人々の者をつ召出し

暮よりして入亂或時は夜討させ或時ハ雑説をいゝせ敵を脅
かし民悉くわさハひをミて急りもいりんと指折て篠原柳井
科州奈川小股寺山日根山村上小笠川等ハ多く有と申せ
信長大に感し汝ら申所尤也とて其所々人を定めて
者共をあつめ名々を付させられける其数二百人とそ記しける中にも
武勇の名高きものゝ姓名を記し出せるハ稲葉太領
青山新七同小助蜂須賀小六川口久助長江半之丞梶田隼人兄弟
日根六之丞松永内匠等也これら多く集めし彼六十人に及びけり
若党等にて中々ハ六十人の者共を二箇所にわけて岐阜にありけり
召しされども大将あらすしてハ手柄有まじとて大将一人仰付らる
召しされハ盗の大将をきらふ事にて不肯まじく候とも秀吉に
仰付らるへしといふ信長ハ又例のごとく出陣を申と思ハれけとも
秀吉が大胆謀略を感じ其命を出されける其後入しかハ諸
将も返し申しける彼ともかくてハ味方にも寄く敷地へ侍し
御部之味方とくとの内ハ大河原にて浅井の使者西濃衆
兵粮にて世の為ハ討死すへき処也古記の詮将も浅原この
んて来らるゝ秀吉が大将を承る事と大気と仰感じ信長
感心して其功の推察をせられしとかや
信長責北近江事
同七月朔日信長より使者を以て濃州浅井の
加藤かゝ色ふ高麗ハ兵粮ハ我領中にても高く大切に候様きこへ平井
加賀守取束人数を大将として同八月朔日近江へ立て信長

今度更迭を防んとも細川幽斎氏家稲葉ふ伊賀桜村刑
部等ハ信長へ一味しきつきれとも惟任ゟ信長も用心乃
為ニ縁者也へニ加勢を乞ふ此等ゟ手へて信長ゟ軍を乞ふニ
先さゟて軍をわするの事れ無き時ゟ此ニ積合ニ入て切へ間を
留しとおかして二千余百餘騎を尾張へ出し信長ハ八月朔日
諸軍へ先ゟ比較命とふれて会ニ於ゟ候ニ此ハ更慶三人
為と一味して信長ゟ勢ニ此ゟさせて手に信の勝負をせん為と
しとやさる所ニ小牧山ニ勢をらへしてゆニ更慶へ殺命と
ふれ出して先ハ手を山のふもし瑠璃寺山の城を攻んとて出
む附ニ陣中よゟ人事れ波旗あり信長誰ゟ旗しゝ実あゝへ大為右衛
ゟ旗ゟりとや信長いゝりて誰ゟ如しして持せゟるそと来りの由

ありとて自ら切てまてゝれゟり見ハ人あまてかくせゝれしを
秀吉慎るんありや有きやをためさせしとゟやさぬるも秀吉
ちつともうらゝる所ゟ神子へ此を乞しゟり細ゟ承へ氏家稲葉ふ
伊賀桜村ニ大かせ付て同しくせめしゟハ終ニ瑠璃寺を攻取り
去ニ信興ゟ左城稲葉ゟ山の城へをしよせしに三人衆ハ西門ニ
火をかけゝり日比信興ハ追庭将監せし岸ハとゝくりちくてん
しられん神戸勢も一支へもさゝへず大役左近へまけりしゟハ
軍兵ハ手勢ニくゝゝまされハ数代のもの八百余騎佐久間ゟ
手へくりて切へ間を信長ゟ兄の加勢とも信興ゟ旗本へくり
首二百斗落河州勢ハ折ゟゟそれ大ニ戦ひしかとも大やぶれへ
責入しゟハ信興力尽て安藤元徳秋といふ一族とともに笠を防

て兵を寄させ親興の城兵の命を助られ城を渡さんといふ
信長諾ありて後しても助へきよし定して親興ハ勝竜寺へ入て門追
き其それより此留の合戦未遂利程を取てかしこに箱櫓岳
なりこれより後ハ一家ハ信長に一家に入なり其後法例
より第を山へ移りなしそ候へし信長の加勢も加勢へ海系
信長より和田又左衛門を以て今度の加勢の志を謝せられ
なり共三人の者へ抜群の忠にて候仍て兼義ハ三人を
褒美して感状並に加恩せられけり

河内一揆信長を討天変並京都大火之事

永禄六年十月十六日河内住人高安左衛門元が子高京都へ来り
申けるハ去年七月六日根来の僧並紀州湯川一族和安見宗房
等を大将として河内教興寺といふ所にて三好長慶が軍兵と山
城守康長安宅摂津守冬康三好日向守定康同久助笑岩康
同下野守康長同備中守康俊并に松永弾正忠と戦ひ僧兵等
にかかりしに長慶が息左京大夫義継加勢して安見等
打負て三好へ降参し事済しに又河内国守に三好左京兆
光政といふ者一揆を企て和泉を追補して民部江の兵を集む
佐々木六角が臣目代山県光浄院より河内へ許へしに
新旗方より蒲生定秀が次男孝紀并河内守蒲生和田和泉守
およそ人にて武佐を立て河内へ発向し畠山を攻しに能防て
居たるを孝紀和田が謀に城兵の妻子共をさらし出てことごとく
く生とりて楯の面に引渡して城を攻むる故城兵防ぎかねる

これハ大力三室左京亮勝力ニて鎗を引とし手分一揆
の棟梁七十三人首を斬べく手来を誅し諸手三千人を助ヘ
とりしかハ掛合ホ彼七十三人を討て出し助命しけり仍て河
内一揆ハ静り申上る時ニ十二月十日卯刻より大雨車軸を流
酉の刻ニ至り忽ちニ雷鳴震動そくめき稲光きらりとして夜ニ至
至りせり雷ハ将軍の御所の東門へ落て御殿ニ火をも付たれ
焼けりやニて出来の所ニ至る西町四方満火の為ニ焼失せし又同日
洛外東光寺本堂へ雷落て沙門三人即死して本堂塔中院
院坊と皆灰燼となる又大雨出て民家を流す極月の大雷前
代未聞とて陰陽の博士ハ是武家の亡び位を滅し洛中
火災の凶瑞之となす申けるに同月十七日笠原細川氏緩坂

死しけり是ハ長曾我部が毒飼せしと沙汰しけり氏経が申す前後極
忠節るハ将軍家へ仕へしが口惜く思へとも長曾我部が威ニ申す事ていい
けりを押へて居たりけり同ホ十一日笠原氏晴元細川か旧館より出火
して西京大宮の家数四十余軒町数九十一町焼失せし焼死の者
三百六十人とぞ聞えし

太田源六叛逆付 鎗将軍家 松永大膳太田源六勇力之事

武蔵江戸掛ハ近年小条氏康せめ丸て家臣太田山丹波守実俊之入
置けりしかるニ江戸北條人太田源六資高と申ハ大力の誉れ八人力
肩を双ふ力士もなし三十人ニても動しかたき大石を捧ぐるとし
動かしとの四国肥前の人申源氏三郎資宗同源四郎資俊
とも小勢ハぬ大力の聞え高き彼兄弟三人ハ扇谷上杉定政の老

后太田資長入道道灌が子也父道灌ハ主人定政山内の顕定に
謀られて罪なくして害せられしかバ三人浪人して北條へまいり
しより久しくして遠山が与力とし江戸城に在めまかりけるに永禄
七年正月兄弟三人談し先ハ北條家の恩を被りて大永三年
氏綱を江戸城へ入て憲政を追落しけるハひとへに我家が功労
に父の忠戦なる江戸城ハ定て我手に与へられんと思ひしに存の外
遠山に与へ其与力となされ面目なし所詮太田美濃入道道実正
三楽に再会せ里見入と義隆心を合せ遠山を追討し其跡を
押領し江戸の城主とならんと思ふ之と三人一同して源六大
菩提所日蓮宗にて神田といふ所に法恩寺といふ寺の番神
普請とて遠方出世しと兄弟等神前をのりて宿

所へ入けり書付ハかくと通ず三楽此方書付を返しける源六行にけ
にて再ひ書付にありて大に悦ひ源六に一味し使を里見義弘
并義隆父子へ遣しけれハ里見入大に悦して安房上総下総の勢を
あつめ総勢を出す法華寺の住僧ハ太田が企を
聴くと考へて身の後難とや思ひけん遠山が方へ行て源六が謀
を密にして遠山をとゝろき彼書を出さんと思ひに其を取つめ
したに源六是を聞付て吾銀本仁の宿所を夜中に思ひ出ていて
付へ移りけり遠山丹波守数百人にて太田が宿所へ寄よ
一人も無かりしかハ二百人にて追かけしとも敵ハ五月の程なれ
ハ追付ることかなハず遠山ハ氏康を小田原へ達しけれハ氏康氏政
永禄七年正月五日小田原を出立て葛西桐中其日の夜を引ふして

要所へ討向ふ源五六か謀にハ里見人退散として小勝井出なから源六
ハ氏康父子の無勢に乗して氏康父子の旗本へかゝり手結乃
御負せんとせしに謀あれハ力なくして岩付へ寄のかされ
三宗ハ源五六兄弟を先陣として松合二子の岩付を立て葛西
にかゝり市川辺りを掃へ無事の舟先打てくき橋の形とし里見
か陣鵠臺に寄せ来松戸渡しも足軽を出し舟とも打こへ国府の
ともに乱くいを打て前底に大法切をふりて打かけにけり
鍬代并山丹波ハ富永三郎左衛門元信小金高城胤辰紀流辰
ことハ氏康より先んにを入て鵠臺の下なる賀度女波川の大手
流を為して陣しけり氏康父子ハ伊相武の三ヶ国の勢にて氏
康ハ大手市川へ氏政ハかゝめ手松戸へ寄せ同七日里見先陣又

手人鵠の臺の前より上らり人数を入り上前はやの松林を
ろに当て中段に備へしを并山富永高城ハ敵ハ引と兵とみ
てかゝめき川へ打入て未ちりにく市川口の入江の細橋を前に
とゝまりて先陣の坂中にて里見勢ハ地理をもふ前で陣し
栢木太郎正論ニつらゝ江戸人守の先陣を先掛にまさしかさして
先をむに黒河権左衛門川勝又次郎同三郎太田源五六中村源次三郎
同源四郎麻富七郎なといふ党もある大力とも一面によゝて
陣に小田原方ハ敵を笠にうけ里見方ハ敵を目の前に見下し
雑々に太田源五六ハ并山父子をかゝ〳〵て打てかゝ陣に并山か
家人六騎うけ屈ゆてしを源六ハ五人斗の太刀をむへて六騎を
切て崩し終に并山丹波を打それより小勝方の大力清水

大膳か二の次ハ樫の木の棒に筋金入て打かゝり源六にとびかゝり
命ハおしからす戦しか源六か老人の肚首は汝をもとふり打れ
んとおもしろやとひらかいふて手はうりそれより源六ハ八丈
八尺にておる長八尺ふとさ九寸斗なる鉄の棒のはしに手て
四角八方を打てまはり須臾に打ちらんとせしに終にめくり向ひ
来小田原方の者とも源六を見知れなからんと大勢かけ
よるをみる人はきらひなく矢場に十將結らち出せんりを斜
入るとハみんえさりけり此の時小田原勢の中に右田上野介資寛
といふものありけり源六にも一そくにて志らも源六か志うとなり
しか源六かなるまいをみんてまるかけよせて源六か先非をひるかへ
して降参しめへそれゆかくてしハ命斗ハ助けさん今日乃

なるまいハ資寛も晩入ゆといふかれて源六か哭てむこのちんてくるき
今日初て此懐ある人しとて上野介まうつて我は資寛にて
まると源六先非なくらつて我は資寛も右方にてうけ流
んとまるまに何かとみてたちゆるき胄の緒はきちんにとゝらけ首
骨打て胴の中に入てあるに源田へ立ちむかひ居しか小田原方ハ
上野介と源六ハむこ志らとの事なれハ恥なる事にいふまし
と沙汰して資寛をゆるさせし社いまん事なれとさきうちいませんせんと
てふうひあるとすむ里見方ハ源六討死なとて柳本大膳も
先にまゐらむ

柳本大膳ハ里見義弘の一族にて十二三の時より好んて武ま
なるに行手綱を好めり指南の人中ハ行手綱ハなるのうけ川

角の口くくれ此望あるに總領分別なきの所つらいよく調練し功者
に成ての事也初心の人ハ身形もあしく為りけるものなり
といふ大根只て大にうろたへ兄一手の大将たる者ハ馬上より
下りて鑓を合せ刀を佐ふ事ハかれなるへし大方ハ馬上の
御為らんたよへのりなりハよくても馬上の去る者不叶ハ第一
為へしとて馬上此鑓合鞍壷を左右に為ふてりされハ如長
の浮戦場にようる上の功名比類なかりしされハ今度源六
兄弟か大勢に乗出あひされを相ひしも其人三寸の肚左右
のなく二寸所のけ為るを給崇に被りせらるを並べて
馬上の御目を驚しけり
此時栃木をかくらんとて少条考富永三為か山角四郎左衛門中

中条出羽守下死出あひして富永山角中条を先として随一の侍
大将一列にハ騎きつて落ちて其後河村脇坂所治部安人
かくりしをうち手書其手に切て落しけり其外栃木かたへくりき
目を驚かけり当手に吉田源六兄弟ハ大勢の囲を切ぬけ三乗と
一手に加しり栃木か大勢に囲れしを見て源六例の鉄の棒にて
打てまはり前に西を向ふものも無し栃木か一そく栃木淡路守
来るも敵六七騎手の下に切伏せけり小田原勢来て三百人斗
うちれて後加とかんへし時かへあるに氏政ハ松戸此所に居に
大佐為を張し此大勢為らされとうくして鶴喜へ知せ為した
先陣少条狩規例此黄八幡の差物にて大将星見へか旗本へ注き
此原双方入みられ戦ひしに上總介狩規ハ猩々の袖をかけその吹くへし

に矢二筋射たけ地黄八幡の差物も不?を切さかれて敵かなはすして
引退て其ところにて見えさりけり吉田椎木三条等ハ今朝大手
の先手にうちて高名二千余人うちとれし後陣の味方ハ上総介
にまけしそれより鵠の台に陣して明日を待しけり
小田原方ハ大手にて侍大将多く討れしかハ後の軍ハ勝たれ共
台守にて迄おいしにふりけり

二度鵠台合戦付里見義弘敗北之事

里見義弘ハ勝軍して四方より敵ハ気をくれて明日ハ来まし
きとて油断の心出来て大将数十人ふきまへて酒宴乱舞せ
本陣を見まはして陣と皆酒盛し卯の刻ハぬかさりし甲冑も
多くハぬきて酔伏したり是程中なれとも酒を来られハ生乃

の下戸より外ハ酔ぬものハなかりけり氏政の臣田井深えか来人
に横江太?大橋山城といふ思ひの名人ありしに里見か陣を
かゝせ氏形勢をうかゝひて氏康へ告るに兵見ありしかハ康
よりそしよせなハ必定勝利を得んとて市川松戸二手まて永禄
七年正月八日の夜をしよせしに案のことく陣中うち乱立て酔裏
なれハ十方なくまけるし所義弘か一そく里見民部少輔兵部大輔同
兵部利椎木左近弘親同年十六同年七歳肥前守椎木左近
左近一人當千のちからも留りて戦ふ在小田原勢多く
うたれけりなかよ小田原方山角伊豫守定次今年十八歳
に娘しつ侍なにより鵠の台の軍に坂口まて椎木深左
左近と名乗りて力戦せし名何り今日ハ氏名のりて彼深左を

討てたらんといふ人皆いくさなるべからずと申けるか其夜山角
ハ淨正か在所へ継て窺しに淨正ハ素手のものにてとつき打て
左手にて山角を捕て押へ一の太刀のさやをはつし取て差あひ
ますに山角ハ下より二刀さして淨正か首を取けり此時里見民部
甲斐の尉栃木左近と大槻か子共甲斐平六同平七其外七郎皆一処に
討死す此ひまに大将義弘ハ落んとせしに敵十四五騎追来り
又ハ大音あげて義弘か討死の体を見んとて自ら五騎に首をあらせ
三騎切て落しけるに武蔵にや居たりけん矢を射かけ討るゝ如くに流矢
一筋来りて義弘か鹿毛といふ馬に射立るハ大将と見て
と傷れしかハ義弘ハ弓手の足を抜て言葉も下らず既に危く見へけれハ
独へ家人安西伊予實元あふさを合せて世付て乞ける

且義弘をのせ山より上総迄へ落けれハ義弘か安否をきゝける
又里見人々役の付ざりけるを討殺されけるに又ハ義弘の
討死したるを聞て誰か為に命を惜まんとて正木椙山
秋元羽生加藤原在て元一族南七郎筒井伝息恵寺佐貫
多賀越後以下二千餘人槍を合せて討死しけり
千三百餘人ぞうたれけり義弘ハ病に酔て安房
の生て帰るハ希なりけり左田三ツ原ハ源氏と一手に成て例の如
すくらつて帰る者ハ僅に残りけり
小田原方も安房に二千七百人うたれけり
今度義弘か逆口の合戦にといふハ戦ひいかにしても
しらん二十代の名刀大切形（ヲヽキツカタ）小切形といふ二ふりの名刀失ひける

と思ひつゝせし所氏康賞して手捕の高名をさりし取れとも
あやかりし所氏康無念に思ひけり
去程に源六は岩付へ帰り妻女に向ひ去七日出合の父上討死有
それがしに降参せよと申されしかはよくきゝてをとしまてに鉄
の様にてふたを打しかはあへなく落しかは深田の中へしつみ
あやまちやしぬらんとかくる女房驚き下人に申付てかの死
骸をとりよせみれは首は胄とおなしくそらんに有り胴の中へ入
より女房は源六へ申けるは戦場のならひは父子兄弟敵味方と分る
も多之高名の為に正しく親を討しける事に候てあらんは人
よおかしいと海ありて屍にまとり父のおもかけを弔ふとて
源六も阿に見えていと悔をられけるか女房は彼死かいを和田へ
持行て葬礼し彼所に一寺を立て浄念寺と号し彼屍の木
像今の世迄も彼寺にありとかや

謙信信玄和睦不調附謙信以謀今川退信玄事

永禄六年暮信玄より越後へ使者を以て上杉武田の川中嶋
合戦民久しく士卒悉て苦労し自今は無事和睦して他国之
御きやさんし旗本之戦ふ中なれは〇〇〇川は押てハ無事に筑摩川を
隔て川なかにまたせきを取て無事にあるより押かけて押札にて
対面せん従者ハ互に六人にて見候へしといへる謙信同意として
永禄七年三月上旬武田筑摩川の端へ出る謙信ハ信玄に跪く
みてねてしきと思ひるよりたやく下り押机に腰かけれハ信玄
いるよまた〇〇る鐙を〇〇〇して謙信六〇まて〇と〇〇ひとへに

旗下の大将を合戦ある事に似たり謙信大にいかりて悪口しけれハ
信玄聞て何といふとも承ずしけるハ終夜しとして三月
より六月迄對陣して少も出合さりける然れとも上杉ハ小勢なり
けれハ諸勢も疲しけるにて謙信ハ関東十餘箇甲府へ出し信
玄の留守の者とも上杉小勢へ一味して信玄を亡さんと
はかせて上下乞へ火を付させしかハ甲府へ帰りしとぞ　そのてろ甚ひを断極し
されとも甲斐勢おそれ帰りけり此付謙信より武田の陣へ使を以
さて信玄甲府へ引とりと呼く大将無きにて軍ハ叶まじきと
存し謙信も引入れとて同九月に軍をさゝへ世ハ武田の為ほらは
七月を出陣し同十一日に甲斐へ帰る

信玄川中嶋軍付安芸与長谷川組討勝負之事

然ば謙信ハ八千人にて永禄七年八月十日川中嶋へ出陣なす信玄
一万弐千人にて六七日對陣なす武田方家臣出羽と法花党降参
無人ハ十七日の夜柿崎か手へ夜討なす柿崎ハ不意のことなれば少
せしか耳類無し黒川備前無人ハ引ちらされて信玄の本陣へ志し
前けるに左備小田切か陣をはさみ武田の旗本へくずれかゝり信
玄も後陣へ逃入たり信玄出て黄色のほろかけしをなされ
しに乱さされしを上杉方大貫五郎兵衛か下人ひろいとりて主人
時春に渡せる大貫をとけものにて夜半にもち人形を似け件の
黄色のほろかけしをかふせ柿のかたびら一領をきせ古き衣をきせ
て敵陣近く立て侍に武田信玄法師今日改名し逃西黄綿法師と
申てさらし　武田法師逃て後陣へ黄綿帽子をきて梅あり海津長

夜明て甲州勢つゝくれ大事へき根なくつゝくよりけり翌三十八日には

謙信ハ今夜夜討をためて井粉犀川に威勢を与へけりさ候ハ

手に陣を残て軍ハなかりけり然るに信玄ハ越後勢を引して

信玄謙信此両の(?)せり合去る弘治三年より当年まで八年及

くの人亡ひ其内川中嶋四郡のあらそひ之信玄方の味方より

ある長六を出し謙信か兵の中に器量の者と組討させて

手柄を従ひ川中嶋を得る方へ付て軍を止んとてありけり

とて例あるを使として謙信の陣へかくといひ送ける此事あるは

かくれなき大力勇健のものなれへ信玄見て祝し之事ある

長六例上杉の陣へ行しに甚以大和勢出会ひて口上を申す（此口上ニハ天文十三年より今年永禄七年まで凡十一年のとり合といへり）

謙信ハ申されたる越後をあつめかくとかくり

かくせんとあるに皆〻申ハ信玄へ小県領の弥保雅楽助の

家臣花沢の河を小林の武田信廉今川織田か威敵多かれ

たいら信玄の申に従ひ小敵なとを易く亡しそれ信玄と云

二の度合戦あらんするて死なんと申によりて謙信もと同し組討の

勝負にして川中嶋を得付へしとの返事之信玄例組討の役

人ハ安田長六に申付る然長六ハ長六尺寺眼大にして鬼ひとつみえ

によりれ力ハ万人に勝れけりされ坂本に大日源六相手大振

長勇者なれとも長六に手合せされハ甲乙なかりくて甲信

上杉へ互の者ハ甲州勢と出合しかハ長六か力量をハよくされ

あきれハ武田方ハ耕毎ひかり謙信の方よりハ越後勢

か命等に長六川与という者を恐らひ出し永禄七年

八月廿一日高坂弾正より使をもつて敵味方くつろきのんで足輕共を
安房守ハ黒糸の鎧に赤地金らんの袖なし羽おりを信玄より給り
白段胄大たてものに月毛の馬の九寸あまりなるに乗り大なるのほり
迄しきに相手ハ地のくゝり置てあゆませ出て名のりかけを待
上杉方よりハ萎草のよろいにきさひおの星胄に鹿の角
打たるを着紺糸縅胄高くせみ黒馬の二寸あまりもあるらん
ようくし小長の馬にのり出て名のりかけ互に組しか
安房守ハよはき家なりしに長谷川ハ組上ひしく安房守を一刀さ
あそりのちしより拵の下へさし通しけれハさしもの安房守を
返されて首をハ長谷川に取れけり信玄も運の極をさとりて川
中嶋四郎ハ諏訪信へ付られけり信玄ハ安房守か討死をあはれみて子
息安房守ハ法雲院家へ加えられて掛紙して一門の白地に日の丸
半さる旗を給ハし故て切名しけり又長谷川をハ諏訪信虎に若安房
加恩して川中嶋四郎に救家へ付られけり諏訪信虎今の同ハ城保
方の支配なりしに死去の後家康公京都にて家督を許されし
時京都へ下りて家金を武田信将へあたへ家康を許し時川中嶋
を甲州へ付しとかや

参州一向一揆起りし合戦付一揆退散之事

参州一向一揆蜂起りしに永禄七年二月酒井雅楽助正親ハ
西尾城へ兵粮を入桜井小川針崎八面此内ヶ所へ出張し敵中を
隔て候ハ三里なれとも敵地なれハ西尾へ出て小坂井佐久間か加勢を
うけて今月八日八面へ寄手に一揆の籠る砦を攻て大将を討とる

松平勘四郎の与門より出て小坂が勢をくいとめ戦ふさんとて小坂
方打負て退ことなり同十二日家康方石川又四郎根来千内布
施源五郎本多右近出向ひ討勝負に及ぶありて一揆の者渡辺
半之丞（一作半之蔵）箕輪兵部左衛門本多世付て戦ひ根来千内ばかりより布施
源五郎ハ箕輪兵部左衛門を組ふせ首を取渡辺半之丞布施を
討留て兵部左衛門を助く石川ハ痛手を負て家康へ帰る此一向宗の者
合戦年々に二年家康方一家も負ざりしが今度利を失ひけり
あまつさへ一揆の中に高田源左衛門ハ他宗なれとも本多源八郎
西信が四男なれハ此好を以て思て一揆せしが家康方秋元某
方より高田が方へ累代の主君へ弓引何許なしいそき先非
を改て味方へまいるへしといふによりて高田が一手にて十四源八郎

ハ蓮如上人ハ元より云ふにも及ばず蓮如世中蓮如も書翰を
こぶしとの一揆なれハ只宗門の為なれハ
家康公へ訴の事ありける訴ハ参河記一向宗の三ヶ寺上宮寺正
満寺本證寺等の院家衆を取返さん是ハ蓮如世上んとふ
諍證の為なれハ再よ仕せんとの由なりけり此時三ヶ条の訴ハ
一ハ今度法敵しける家人共死を遁り本領安堵の事一ハ三ヶ寺
を如以前可立置事一ハ一揆の張本人并与党者助命の事
右の三ヶ条の内二ヶ条ハ御同心あり但し張本人助命の事ハ加
以ての外し給はず作出さる蓮如下文中りるハ張本人此事を捨ていハ
上野城之酒井将監忠尚東条城之吉良義昭荒川甲斐守義広
桜井松平監物家次其当時今川与力の城々一揆の与一味し

ことに降参し 徳川へ来らんとせしより御合戦ハ西より上和田の
砦へ来て犯法を平ハ此先あらんとて終に下旅ひやかて
犯法をなす
家康公ハ本多作左衛門鳥居忠吉を先陣として土呂を攻られ
しに一揆衆勝のごとく寺内へ火をかけ勝利を得られける時
本多平八郎忠勝十七歳之しか一番に柵を越へ勇をふるひける
ことく発て針崎西尾勝鬘寺に籠る依之上宮寺へ向かひ
又石川日向守ハ針崎西尾勝鬘寺をせめ破りける
家康公ハ桜井城を攻め給ふに上宮寺も不叶して降参す 又円福
も不忠のともから清康へ叛し横死の際ハ廣忠公の所を
うばひとりし今の監物も

家康公へ叛し君ハ三代目ハ二代不忠の者なれ共当家ノ功有
ましてし有しを大久保淨玄入道申ハ小松大臣ハあるときハ君を
なて諫ひよし仰有しに松平貞勝志ふかくハ君をハ何ともおもひ
ふへんと問ふに小松殿雉を射させる君ハ法師之君を諫まゐる君ハ
主君之と仰有しと申あけし大聖を聞召の上本代安堵し名利
それより又吉田甲斐守を攻めけるに降参しけり 吉良川ハ
家康公のいきほひを恐れ不計して今ハ聊さへ彼地ハ浪ぬせける
浪人して河内へ趣一族殖なく病死せしとなり又東条を
攻めける城主力をて黄服ハ吉良の荒川へ籠り六角氏積を頼て
有しか摂津荒川の軍に討死せしとなり 大久保の松平七郎ハ
ありしくやおひらん逆亀井に時も酒井加賀忠尚中ハ上野

城よりうつて出石川日向守と戦ひしか其中へ徳川へ降参の者付ても
〇ひけん駿河へよけり今川氏真を精ニ懸出しかり是ハ左衛門尉
忠次か兄之いさめしかの悟よって年代の君か所きて子孫もなく
またたくさへぬ比附国中平均しられけり上に為る本拠三河ちも
改宗せよとの御下知有しか僧侶男女難きやうに付應宗をハ追出
されけれのよくちにいひ付けり永禄六年の秋より同七年九月
に到るまて一揆動乱せしにある時
家康公危かりし時三河の岡崎菩提所浄土宗大樹寺の住僧登
誉上人へ見りけるに僧侶百姓町人をくりあつめ五人斗御きに候
此時和尚ハ
家康公の白布の旗を授け上人自筆をもって御旗に

厭離穢土欣求浄土の文を書て加勢し出へ利
一揆平均の後　徳川の此一そく十六家の人々より連署をもって
徳川家代々を祈りて年々を大樹寺へ寄年
今度一向宗一揆御大樹寺登誉上人殿加勢御合戦出利
国王之条御前標浄土宗被思食候依浄土宗へ有德御依此子孫
御代々宗旨不可有御改替之旨依御下知如件
判形の此一そくハ竹谷形原深溝五井御油大給
瀧脇福釜櫻井東條藤井三木能見長沢十六家連判状
今より大樹寺にありて家康より又彼八字の旗ハ御代々の
宝器なりとかや
三河平均し今川の旧臣も　徳川家へ属しられハ今川出張為る

あらんしきりにあせよりて忠勝方より一二番といふ処にありて
をり〳〵氏真ハ酒井忠次を先手として一万人を率して永禄
七年三月中旬参州へ発陣し佐脇八幡に寨を構へ吉田城
に小原肥前守鎮実牛久保の城に牧野新次郎貞成が兎を救んと
せり今川方ハ一二番をせめ落んと先手より
家康公ハ三千人斗にて長沢を廻り牛久保へ向ひ給ひけれとも長沢
の城より敵出ん事もはかり難しとて勢を二つに分て旗本ハ
城の南を廻り先手ハ本陣を押廻へしとて寄手をも城中
に火をかけてやく〳〵一同焼立り本陣をはしく忠勝鉄炮を込て
旗本の者とも急に城を攻らんと一同に城際へせめ寄り
旗本の者ハ勿論造ひ込んて手に汗をにきれとも遠へ寄り難し

あし是も同く時に飛りせめかゝ所在城主不意の軍なれはたちまちに
落て城の中に城主小原肥前守鎮実ハ命をとまり〳〵戦ので討死し
その氏城後廻在落すし紀と接りせめ落し其より不意の大に
まて落城もて氏真ハ長沢落城を聞ていよ〳〵有者のいくさ終
んと忠勝ハ浅くけしまたハ分くて氏真の一二番の囲を解て牛
久保へ引入る
家康公ハ牛久保へ兵をかへす是よりさき氏真ハ佐脇八幡に
さくを付け三浦右衛門を入置吉田牛久保を本城とせり此佐脇八
幡ハ以前板倉弾正同主水在城せしを
家康公責たまひ弾正主水板倉ハ没落せる仍て　御門の持城としを一
向一揆の時又駿河氏方の城と成て今度今川より人数を入置

けり
家康公ハ本陣栗原へ出張す氏真も出ていまた軍ハなかりけり
此時引馬城主飯尾豊前守致実今川の陣に有けるか
徳川家へ通して虚病をかまへ夜中引馬へ立帰りしか新居白
須賀を放火し本坂へ御家臣ハ
家康公の謀にてかく雑説を云せられし故飯尾ハ罪なくして
ころされんことを思はれ引返しけりとかや左右に今川ハ飯尾か言
葉を用ひて陣中をしとらせ
家康公ハ又勝して御能原より主を定め駿河勢の先陣と
讃井の者を先切て合戦を初む本多忠勝十七歳にて駿河方
城不取に近江縁と一番に鑓を合せ本田か家人原田源右衛門

田七郎同く高名す氏真ハ井中にて吉田城へにけ入りけれハ是より
駿河へかへり再ひ勢を催し参州へ出張しけるを
家康公ハ敵の以外に陣取ても飯をも不食るのくる者
下し甲冑をぬいて少も遠の陣を休るに電光のことく者
まへハ一戦も及はす甲冑も失ひ本の武具を捨て在軍せ
氏真ハ其まに危かりし事を逃ひ行をかの兵六千余人
討死しける者に氏真ハ虎口をまぬかれて駿府へ逃帰りけるを
一言の返口とそ世上に雑説て沙汰せり其後牛久保小坂井藤
城して牧野新次郎降参しけり此軍の後ハ西田丹波守[illegible] 二連木城を
牧野三浦と一味して戦ひしか後こそうちやすけれ
左京亮しる城責付に西田丹波守左馬亮某 吉田城三州一宮之城
[illegible]三年

飯尾豊前守致実ハ父豊前守乗連より今川旗下にて左の者なり
しかいふ故ありや生れ付て新野左馬助親規同中務元規
等三千人同年三月下旬引率へおしよせしに城中よく防て
新野左馬助ハ鉄炮に中りて討死す依て軍を引久年まて然比
京伴中務 浅名陸奥守等数千人にて向ふ城中より矢多を射て
これをしりそく氏実の難を救ふ可き所ニ然るに 徳川へ一味の説襖あ
アやめ白須賀人教ハ一よのものくよのあやまち故しかれし
謀叛なくハ先日氏真に参り出より御陣の御縁因寺へ申合せ
此城にて及を示さるるハ此難義なり へしさくく謀叛にあらぬ
よとて起請文を出しけるかともかくも御倍てへ生城させられ
しにいく程なく辛病をうけて辛未年豊前か後家二十才なる

男子を為に引馬城を守り年月をおくりけり此以前東三河吉田
城主小原肥前守鎮実之しかるに在番の倍の人質をこれあつめ吉田
城へ入置けり此時設楽城主設楽甚三郎 野田城主菅沼新八郎
下条城主白井某等皆 徳川へ心を通しける二連木の城主
戸田丹波守重貞も 徳川へ通せしかとも母を人質として
吉田に置しかハ何とそ取返さんと心かけ同年四月初より
謀をめくらし 肥前守と双六を打てしたしく交り四月十日
の夜もまた丹波守双六を打て五ツ時過もまいりて居るに
茶菓子酒肴を出しけるに丹波守近習へ入て吉田か家臣肥後と山門通助
宰領して城中へ引入て門番を呼のふさきを明て人を入せて
此者ハいやうへ見しける故遠道なく通し城を兵籠り城中へ引き

入て件の酒肴菓子を紀伊守へ贈参し給ひけるとかや丹波守
か母衣を畳ミ出し彼長持の底に入てうへに件の酒肴を入
五郎共とも従ひて又聖か山一所に出て箱のことく蓋を閉て
見せて丹波守か手紙一通渡しけれハ家老ハ事なく是を見て
丹波守ハ手紙にて志ハらく双六をおりて何となく城を出て
るよむちうち二連木さしてかゝる処に長尾等差て来るとのうわさ
途中へ出向ひ母衣と丹波守ハ訊かしく城へかへり其後　徳川殿へ
かくと申されハ大に御感ありて褒美をたまハり吉田を改て松平
小族にかへり其後　徳川殿ハ三ヶ所に取りて堤築か所を見る
城にハ鵜殿八郎三郎長照　精塚城にハ小笠原新九郎長盛(アキラ)　二
連木城にハ松平丹波守康定等籠城して吉田城を人質とし行(ミタチ)年に不

所にて合戦し小原も城より出て戦ひけり鵜殿も小笠原も悠然
まて遂も力戦しけりか本多忠勝十七歳にて小原か郎ホ牧数馬
次郎と一騎討を合かり本多か家人ハ松田七郎大京三なるか
伊奈市左衛門よくたたかく悠然もいつも先かけせしか今日も
本多に誘られ二騎ハ論ありしとひとり討せし敵二人の首を
てし処を吉田城中に酒井左衛門尉と号ス決絶の上手か大名川玉
まて返り門かふと人あへりたちまち了え木沙剣の悠然左衛門
あり敵に首ハとられさりしか痛手あれハ終に死けりこれ其後
松平丹波守本多秀良郎　酒井左衛門三人方より小原か方へ和平を
云入東参河を一統に　徳川へ付られハむかしのことく今川殿に
路て忠をつくせんといひける　紀伊守も粮をつくりて成合に

従ひ相続を尤かなし吉田城を渡し相模守ハ駿河へくりなり
自是参州一向
家康公の支配となる付丹波守に加恩せしむ六月廿二日には吉田
城へ酒井左衛門を入置る吉田をあつかりしは西尾とぞ見えし

総州臼井城責 付 松田吉田勇力 并 謙信相州発向之事

越後謙信ハ兼て里見義弘其子義頼と一味なりたるが去正月
七日吉田源六が謀叛の時も二末より志らせて既に出馬せんと
せしかとも今年ハ早く雪ふかくして延引の為に里見へ彼
れしかハ謙信ハ世人の口兼に里見が恨をおそれて下総へ出陣し
北条が持城一ツせめ落して其をたいらさんと思立て三月廿日
下総国臼井城へ押寄此城にハ氏康旗下原式部胤貞
籠りし平城にてさのミ要害ともなき地なれバ孫とも後々の城兵破
壊もたやすく先城主此胤貞ハ同国千葉介が譜代原の一族にて武勇
等倫を越へ不知も多かりしかハ矢もおそれて又氏康小金利根の城
民部ハ百騎二百騎を引つれ其の外も五六千騎にて持たる大守の侍
あまた持て世人ハ千騎にも勝りたる城とぞいひけるされバ重ねて今も
加勢として椎津隼人椎名孫九郎等数百の兵を率して臼井城
へ立籠る又北条旗下大須賀信濃守小田孫左衛門海老も兵を引て此城に籠
りしかハ人々ハ然とも謙信の大兵を防くへしとハ見えさりけりされ
安房の軍配者白井入道も折ふし下総に在しを原招き入て城に籠り
白井入ハ敵の兵気を見るに更に負へくれハ敵陣の上に昇気(タツ)を
見るに殺気にして因窮に洩る味方の軍中の気を見るに皆律

軋よして玉桐に海ゟ敵の松軍艦ありしとやかれハ皆くいさミ
たり藤代の先陣柳瀬川田藤左衛門同源六兄弟三人長井丹
後門並ニ度梶原平三郎宗仲 此宗仲ハ三木ゟ子ゟれた梶原家を
継たり 此宗二子ニおりて大手かゝめての先陣ホ一手勢四千人にハ
及ぎたり藤代も四千人なる多き座ぎてし侍たり鵜沢方の先陣四千
人臼井の四面を囲息にせめ多ゟ宗大荒ゟ撒民部小倉刑部右衛門
山口五郎兵衛両井式部木靫ひてし寄手ハ引てた人ゟ兵を撒方の立居
依人百三の助松田孫左衛門秀材ゟ同く百余騎人出て赤りそく
敵をくいとめしに寄手兵ひらかれハ藤代の旗本そく斃き
く修松田孫左衛門ハ大長刀を以て侍おほに立て敵ハ人手の下
にあきらせ長刀を下人に渡し一丈あまりの棒を打かりて

馬上の敵を打落し五郎力に鉄棒砕鳥まて又かれか継に
陰山新次郎粉本侍五人ゟ寄よく戦ふ大手の寄手の形柳瀬左
此由に源六ゟあくハ孫左衛門にゟ御働ハさせまじきにかゝめそに
有てそ不至一あれ源六ハをうりよせんとて三木ゟ方へかくと云所
左れハ源六剣を世来る左面源六例の鉄棒をとりうけ松田孫左
と勝負せんと来りしに孫左衛門を初め敵多く人数をまと
ひ撒へ入る其中に手柔ゟ加勢三千餘騎軍走るくして撒所に
有しを源六見てさきに松田に討れし程ハ只そ源六返復せん松
田斗ゟ敵あり人きやいて抱えせんとて只一騎入せ入て鉄棒にて
敵きこを走て近より合戦二人并郎等十騎を従兄中ノ十三騎
討入しに源氏三郎源四郎もをとらぬ大力にて二人へたちに棒乃

国立公文書館
National Archives of Japan

梓の九人斗なりに節会てさしいのち生へてるを以て討てまいり
るまに手負ふ三十余騎十三騎にかゝ立ふられ十九騎ハ白に兵衛三之
に討れて十二騎ハ遠ぐて城へ引け入りけり源六兵衛城に向ひて大音
上て正月七日鵠書にて手合せし人々ハ手並の程ハ知らん
松田孫太郎と申人にて今日の軍にいつめしきふるまいしのふ
と成るそと兄弟して勇も力も識敢ほとよふんいる孫太郎も
出て勝負せんと争しを同僚ともをさへて敵ハ十余騎出るそえ
一人いてぬるまじと制しけれハ松田ハ出さりけり源六さてハ孫太郎
も鬼三を振りるぎし今日八日るれまりぬ軍ハ明日といひて立退十
三騎引之てしりけれハ寄手仕寄を付て城をかこみ川か城中
よりハ矢炮も謀させて浮華一人くまむかまとせ見ハ悪日なれハ

白井か制しけるとかや謙信ハ不審してきの方城ニハ指軍して
御て今日かく陽便なりハいふことと申せハ本庄ち兵衛申けるハ城中
に白井入たといふ軍配者ありと而る今日ハ千悔日とて先負
なる悪日なりとそれゆへ出ざるといふて候と申ける汝に海北隼人か辛負も
同くかくれハ謙信も尤もあふんと申さるゝ所に山の斥候に跡し
なる越後勢の後陣へ斥候(イ岸)落て山きはに示る足軽の三十余筆
乱(ラシ)よりさけて死ねりそれより城攻をやめて軍立をまとひし
にて為時社寄なれとそ松田孫太郎先覚して越後勢に打て
かる本武統ハ松田討手なと續けんとて五百七千余騎打出さる松田
力を得て一度にきんて敵七騎つきて崩れて松田かるに矢あつた
それハなりさまに出て戦ひしよるふの軍も錦原方まけさり

謙信ハ孫太郎か勇力を感して足利の忠臣に赤鬼佐といふたん
一定氏松田か彼孫を従者として□ふさん敵なりしも
けなけなる働なりしためしなれハ孫太郎ハ忠臣に准したり
謙信新発田尾張守に下知して敵ハ大略微塵に押て出らん海ハ川ち
之て城を守とれと有しかハ尾張守ハおそろ敵をよせよつんて
城の大手の木戸へ寄ると見へてうち出すかりし臼井勢城中へ逃
入を新発田急ニせめしかハ城兵百余人うたれけり城より先負の
熱田とハ志られける城中より先をして利を失ひけりされとも実ハ
然るなて城をせめし故城兵数少ニて謙信此智之とそ申ける
其後謙信ハかく城責延引して敵ハ自然之こゝろえハ不知案内之
氏原加勢せハこゝろ難義来へしいそき城を悉不残せよとて同

廿六日偽をまて引之ける城兵是を見てくいとめんとひしめく謙信忽
てかくつらんと整へして人数を乱すように見せて引退しきを城より
追へきたる節に伏兵をもふけ伏の大将にハ吉田源六兵衛三人ニ百
余騎をさし添へて伏せしむ城兵ハ敵方の謀をハ志らす只追かくる
ところにて城主原式部同大蔵松田孫太郎平山四郎酒井式部
なる城兵部小金別部千葉か加勢椎津隼人椎名孫九郎等究竟之
の兵七百余人今ハ一人もあまさす討てくれと揉合ひ一陣くすれて戦
ひて後陣へ出陣を引て居合なり城兵ハ伏兵のあとを一所ニ追撃
此吉田兵衛百五六十人斗りとをめいて臼井勢の中をつき切る源六
兵衛例の様をみて三人をかひあひて臼井勢ニまて退を
たくさく臼井勢ハ□よなかるぬを伏兵の偽二手に合てうちなを

戦ひけるハ鉤手鎖おもくへるもて懐中へかけ入けり其中に松田ハ変人
八寸の指揮丸といふ脇差を以て近よる敵を切て落し尚もいて落
し威をふるふ左田源六をおもふに見て松田なりとふん生捕にせんと
おひて頭棒をおかりて飛かゝり丁とうつ録左衛門も上より
なからも太刀を取て請流しけるか秘蔵の指揮丸継手より一
尺斗置て打折れ松田叶しとや思ひけん請太刀を合て逃さり
ける源六ハきたなし松田のがさしと追ても松田ハ勝る源六ハ
常の足にて追つき又手に手を合んていかりけり懐に収めしてたれハ
譲作ハ志つかに鎖をとりなひて作の跡へ結ける今度の松田が働ひ
目来よりも勝れたりとて小栗氏康より感状をあたひ田領といふ
郡にて二百貫の所領をあたふ此合戦より後松田を鬼源左衛門と申

せしとかや譲作も三浦源六兄弟にいと劣らさりし忠勤へ励りしか
源六ハ武名を立其の岡市東名にて二百五十貫を遣せ合戦
二人に百貫つゝあたへけり同名同月譲作ハ作名へ数向し七度ほ戦
けり作去ハ四ツに出るなかりしに四郎摘報ハ同出作左衛門に有しか
夜々けよりして左せ来り譲作ハ千五百騎にて押へよる処へ僅に八
百余人にて軍を仕りけ難んとしけり譲作涙を流し感し
告ハ摘報当年あなたも無双の猛将なり千人にまさる勢にて
事か大会に満んとしまさりさきなる源氏の末流一生の恥とそ歎く
通らんまてと討に来大会にて彼をうつるをとるか命しとて剣
軍をえへされけり此時譲作の斥候二騎のさくれ陣厳してし処を
摘報ころからか追かけて一人の武者を切て落し其後深刻也摘報に

終に其今一人を討とる鎌倉の兵ハ又何れも見あつまりして軍を
又しけり加賀守かうちとる敵ハ義舎義勝と云ものなり　彼ハ武田
逍遥軒の家人なりしか去比清峯全九年三郎と喧嘩し挙
へすけり其相手を各々与力して居られしか今度討死しけり

安宅冬康誅殺　付天下怪異　并三好長慶隠死去事

義輝将軍此ハ好色にましまして例に倍々人多く已にならしめ給ふを
終しきてしきをハ悪しとも云しかとも本にて去る安宅摂津守冬康
ハ三好長慶か弟にて諫をむつましくりし継かいらる好色の
者の際とあや罪の紀明も不及同年五月河内国飯盛城にて
ゆへ無く誅せらる長慶又骨髄に徹し多くしきと止娯しおりし
か喜病を受しかハ代官として松永弾正ひとり威を振ひ天下の

権を専らにす今年天下あまねく旱魃し六月一日より晴を毎一
滴もふらす京の池の一丈余涸たり同九月十九日申刻天下大地
震ひ海を山とし山を海となりて人多く死す此時白髭の社
の上の岩より二十尺斗なる白蛇出て湖水へ入る所の者ハ之を
見たり又甲賀山より白鹿一疋出て民ともにさわいて作る木
義秀へ参る義秀ハ珍瑞なりとて将軍義輝公へ奉る京中の者ハ
白髭の神慮なりとの沙汰へ来けるとなりしに義輝公ハ珍祝
やうそひらして皮を剥て禁中へ奉る其後十二日大雨ふり雷おひ
たゝしく内裏の塔へ雷火落て本能町焼失す其外洛中洛外
十ヶ所に雷落て民屋おほく焼けり将軍の御所へ落けるも漸くに
消しけり又将軍家御殿の東の方に夜々人の声して三好か

かくとや上て和尚の出家を哀とし其光を受しむる子の刻
計よ虚空より黒雲一むらおこる其中より人の渡る又地よ至
きて衣さまし為なそろへ雲ハ漸く消て渡る又も此行
其外疫病はやりて人多く死けり人皆世をあやふミけりまたよ
長慶父子ハ玄以か宅にてより病付て四月の比より患
蔵前よ生と云して長慶死されともかくかくして謹しみ給
無慶のあるをむくいハ長慶の死跡の左右を為せよといひふくめ
同月四日よ卒しける松永か為様して長慶の死を三年とかくして
葬礼をも世すかくし納て永禄九年六月廿四日死去のよし披露
して河内よて葬しけるハ死るハ大事とそ称しけりや長慶死去の
後ハ病年と称して人よ対面せす松永諸代なしける十河民部

左衛門一存ハ長慶の弟なれハ一存こそ跡をもたくへき
松永ひそかに威権をとらん為一存を久秀 松永 中あしく一生よ用なり
有る時十河と松永同道して有馬へ湯治せしに十河河原毛の馬よ
のりしを松永見て此湯の権現ハあし毛の馬をきらひ給ふと云
諫るえにいひしを云聞て一存和泉の城何そ訴として乗まし
きとおほせんや乗給ひつる事なれとて彼か為よて覚山せし
か湯治の後頓死しける十河か兄三好義賢入道実休ハ入道の身
なれハ諸事をいろハす長男後に長慶ハ御人なれハ大ハまり長
慶なとく義継ハいまた年若なりけれよ松永一人の儀にして上
松永か計ひよて管領細川家京の政所を掌る松永殿の民尾
小様なよ二ツの可りるけなり二ツの役といふるハ左兵衛とも

まれなりし松永弾正久秀を亡ぼしそれより武庫川の辺へも来
表ハ威伎をかくへしとて讃岐しけり今氏の為なきハなけれし杵楞
出ハ之様一ぞくの本氏なれハ恨つきさせて筑前守ハ赤松殿の不和
抑寄騎なりとて一家の者と不和になり帰るに及んとて阿波
出より篠原右京亮上洛して其の本領のまゝを差戻へくハ和軍
させけりされハ一家の騒動ハなかりけり

結城晴朝并小山秀綱下野守佐野城主責の事

今年六月関東に軍有り是ハ結城城主結城晴朝ハ父七郎政勝か
時より北条氏康に従ひたるを其しより氏康氏政父子共に宝(?)のに
政勝さん(?)として結城か功をも賞せさりし剰へ結城氏を滅ぼせんと
せし依て晴朝ちからにて北条に義絶して佐竹右京大夫義重に一味

其比小田原へ聞えしかハ氏政下総古河へ出張し先ツ結城の持城
小山城を三日三夜にせめ落し城主以下十三人か首をきりかけにけり
其子守殺され水谷三郎左衛門尉并純(?)常陸多賀谷左衛門尉滝常陸稲子(?)
篠合民部少輔ニ至る迄結城の一味をそむかれて北条へ降参せさりしかとも
結城の臣水谷伊勢守同兵部少輔岩谷(?)同兵庫左衛門ニ至る迄旗下
山川中務大輔同兵部少輔益田中務壬生城主壬生中務大輔に太田太膳
下野ハ佐竹集人館林に篭居同隊に上杉(?)左衛門并佐竹の
加勢等小山の城夜小山氏輝か兵と対陣し一年に五度宝(?)百塚
にて合戦毎日也此時又佐野城主佐野小太郎昌綱ハ足利
又左衛門尉昌綱の十六代の末也是も北条をそむきて上杉謙信へ一
味し謙信の一ぞく虎房丸を養子として佐野の家を継しめんと

計りけり氏政いかりて佐野城へおしよせて攻させらる小田原留守居
急ニ城をとり巻攻取定る所ニ長尾(?)の城をも攻落(?)し總攻
幸ひ此山城ニ大貫越中守か定(?)ニ竹(?)氏(?)次郎清素(?)法印(?)久
能(?)守り秋数山上ニ居(?)たる者(?)共少々(?)小屋(?)を守り当(?)家(?)を籠(?)
等守りを不惜防きしかハ小田原勢難(?)儀(?)にして氏政ハ城を退(?)て
其古河城へ引入て同七月上旬ニ小田原へ帰りける扨(?)上杉謙信ハ
今度佐野家臣ともの志(?)くさをしのきて感状をそ下され旁(?)共
家臣をはなれ(?)ける年経て謙信病死しけれハ根元の其(?)某(?)にて
虎房丸をハ猶後へそしけるか佐野家をハ継させける此氏房
城ニハ足利晴氏の末子義氏関東の公方として此城ニおしまゐらせ
氏康ニハ聟なる故ニ敬しけれとも武威もなく不肖もおくある方(?)

とや名乗之東国ハ北条方謙信方里見方佐竹方と此四家ニ
分れてせり合止事なし永禄七年も暮て八年ニ成ニけり

日本政府圖書
內閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan